

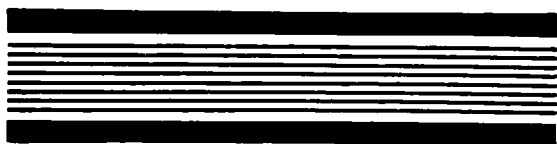
日本文学全集
23

井伏鱒二

山椒魚・さざなみ軍記・多甚古村
本日休診・駅前旅館・珍品堂主人・他

河出書房

井 伏 鱒 二



カラー版日本文学全集 23

1969 ©

昭和四十四年四月二十日 初版印刷
昭和四十四年四月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著 者 井 伏 鱒 二

発 行 者 中 島 隆 之

印 刷 者 草 刈 竜 平

装 幀 者 亀 倉 雄 策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製 本 加藤製本株式会社

製 函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロース工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

井伏鱒二

山椒魚

..... 五

朽助のいる谷間

..... 八

屋根の上のサワン

..... 一〇

さざなみ軍記

..... 一三

丹下氏邸

..... 一七

へんろう宿

..... 一九

集金旅行

..... 二一

多甚古村

..... 二八

本日休診

..... 一五五

駅前旅館 一八九

珍品堂主人 二五四

厄よけ詩集 三二〇

注 釈 三三七

年 譜 三四五

解 説 三五三

巻頭写真 榊原和夫

色刷挿画 高島達四郎

朽助のいる谷間 新井勝利

集金旅行多基 裕伊之助

古村本日休診 駅前旅館 珍品堂主人

ささなみ軍記 駅前旅館 珍品堂主人

井
伏
鱒
二

山 椒 魚

山椒魚は悲しんだ。

彼は彼の棲家である岩屋から外へ出てみようとしたのであるが、頭が出口につかえて外に出ることができなかったのである。今は最早、彼にとつて永遠の棲家である岩屋は、出入口のところがそんなに狭かった。そして、ほの暗かった。強いて出て行こうところみると、彼の頭は出入口を塞ぐコロップの栓となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼の体が發育した証拠にこそはなつたが、彼を狼狽させ且つ悲しませるには十分であつたのだ。

「何たる失策であることか！」

彼は岩屋のなかを許されるかぎり広く泳ぎまわつてみようとした。人々は思いぞ屈せし場合、部屋のなかを屢々こんな工合に歩きまわるものである。けれど山椒魚の棲家は、泳ぎまわるべくあまりに広くなかつた。彼は体を前後左右に動かすことができただけである。その結果、岩屋の壁は水あかにまみれて滑かに感触され、彼は彼自身の背中や尻尾や腹に、ついに苔が生えてしまったと信じた。彼は深い歎息をもらしたが、あたかも一つの決心がついたかのごとく呟いた。

「いよいよ出られないというならば、俺にも相当な考えがあるんだ。」しかし、彼に何一つとしてうまい考えがある道理はなかつたのである。

岩屋の天井には、杉苔と錢苔とが密生して、錢苔は緑色の鱗でもつ

て地所とり（小兒の遊戲の一種）の形式で繁殖し、杉苔は最も細くかつ紅色の花柄の尖端に、可憐な花を咲かせた。可憐な花は可憐な実を結び、それは隠花植物の種子散布の法則通り、間もなく花粉を散らしはじめた。

山椒魚は、杉苔や錢苔を眺めることを好まなかつた。寧ろそれらを疎んじえた。杉苔の花粉はしきりに岩屋のなかの水面に散つたので、彼は自分の棲家の水が汚れてしまふと信じたからである。剰え岩や天井の凹みには、一群ずつの黴さへも生えた。黴は何と愚かな習性を持つていたことであらう。常に消えたり生えたりして、絶対に繁殖して行こうとする意志はないかのようであつた。山椒魚は岩屋の出入口に顔をくつつけて、岩屋の外の光景を眺めることを好んだのである。ほの暗い場所から明るい場所をのぞき見することは、これは興味深いことではないか。そして小さな窓からのぞき見するときほど、常に多くの物を見ることはできないのである。

谷川というものは、減茶苦茶な急流となつて流れ去つたり、意外なところで大きな淀みをつくっているものらしい。山椒魚は岩屋の出入口から、谷川の大きな淀みを眺めることができた。そこでは水底に生えた一叢の藻が朗かな發育を遂げて、一本ずつの細い茎でもつて水底から水面まで一直線に伸びていた。そして水面に達すると突然その發育を中止して、水面から空中に藻の花をのぞかせているのである。多くの目高達は、藻の茎の間を泳ぎぬけることを好んだらしく、彼らは茎の林のなかに群をつくつて、互いに流れに押し流されまいと努力した。そして彼等の一群は右によろめいたり左によろめいたりして、彼等のうちの或る一びきが誤つて左によろめくと、他の多くのものは他のものに後れまいとして一せいに左によろめいた。若し或る一びきが藻の茎に邪魔されて右によろめかなければならなかつたとすれば、他の多くの小魚達はことごとく、ここを先途と右によろめいた。それゆゑ、彼等のうちの或る一びきだけが、他の多くの仲間から自由に遁走して行くことは甚だ困難であるらしかつた。

山椒魚はこれ等の小魚達を眺めながら、彼等を嘲笑うしろめしてしまつた。

「なんとという不自由な奴等であらう！」

淀みの水面は絶えず緩慢な渦を描いていた。それは水面に散つた一片の白い花弁によって証明できるであらう。白い花弁は淀みの水面に広く円周を描きながら、その円周を次第に小さくして行つた。そして速力をはやめた。最後に、極めて小さな円周を描いたが、その円周の中心点において、花弁自体は水のなかに吸ひこまれてしまつた。

山椒魚は今にも目がくらみそうだと呟いた。

或る夜、一びきの小蝦こえびが岩屋のなかへまぎれ込んだ。この小動物は今や産卵期のまっただなかにあるらしく、透明な腹部一ぱいにあたかも雀の稗草の種子に似た卵を抱えて、岩壁にすがりついていた。そうして細長いその終りを見届けることができないように消えている触手をふり動かし、いたが、いかなる料簡りょうかんであるか彼は岩壁から跳びのき、二三回ほど巧みな宙返りをころもて、今度は山椒魚の横っ腹にすがりついていた。

山椒魚は小蝦がそこで何をしているのか、ふりむいて見てやりたい衝動を覚えたが、彼は我慢した。ほんの少しでも彼が体を動かせば、この小動物は驚いて逃げ去ってしまったであらう。

「だが、このみちの虫けら同然のやつは、一たいここで何をしているのだらう？」

この一びきの蝦は山椒魚の横腹を岩石だと思ひ込んで、そこに卵を産みつけていたのに相違ない。さもなければ、何か一生懸命に物思いに耽かたがっていたのであらう。

山椒魚は得意げに言つた。

「くつたり物思いに耽かたがたりするやつは、莫逆ばくぎゃくだよ。」

彼はどうしても岩屋の外に出なくてはならないと決心した。いつまでも考え込んでゐるほど愚かなことはないではないか。今は冗談ごと

の場合ではないのである。

彼は全身の力を込めて岩屋の出口に突進した。けれど彼の頭は出口の穴につかえて、そこに厳しくコロップの栓をつめる結果に終つてしまつた。それ故、コロップを抜くためには、彼は再び全身の力を込めて、うしろに身を退かなければならなかつたのである。

この騒ぎのため、岩屋のなかではおびたどしく水が濁り、小蝦の狼狽うろたへといつては並たいていではなかつた。けれど小蝦は、彼が岩石であらうと信じていた棍棒こんぼうの一端がいきなりコロップの栓となつたり抜けたりした光景に、ひどく失笑してしまつた。全く蝦ぐらい濁つた水のなかでよく笑う生物はいないのである。

山椒魚は再びころもみた。それは再び徒勞に終つた。何としても彼の頭は穴につかえたのである。

彼の目から涙がながれた。

「ああ神様！ あなたはなさけないことをなさいます。たつた二年間ほど私がうっかりしていたのに、その罰として、一生涯じうぎやうこの罅ひまに私を閉じこめてしまふとは横暴であります。私は今にも気が狂いそうです。」

諸君は、発狂した山椒魚を見たことはないであらうが、この山椒魚にいくらかその傾向がなかつたとは誰がいえよう。諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけません。すでに彼が飽きるほど暗黒の浴槽ゆそうにつかりすぎて、最早がまんがならないでゐるのを、諒解りやうかいしてやらなければならぬ。いかなる癡癡病者ちちびやうしやも、自分の幽閉ゆうへいされている部屋から解放してもらいたいと絶えず願っているではないか。最も人間嫌いな囚人でさえも、これと同じことを欲しているではないか。

「ああ神様、どうして私だけがこんなにやくざな身の上でなければならぬのです？」

岩屋の外では、水面に大小二ひきの水すましが遊んでいた。彼等は小なるものが大なるものの背中に乗っかり、彼等は唐突な蛙の出現に

驚かされて、直線をでたために折りまげた形に逃げまわった。蛙は水底から水面にむかつて勢いよく律をつくって突進したが、その三角形の鼻先を空中に現わすと、水底にむかつて再び突進したのである。

山椒魚はこれ等の活潑な動作と光景とを感動の瞳で眺めていたが、やがて彼は自分を感動させるものから、寧ろ目を避けた方がいいということに気がついた。彼は目を閉じてみた。悲しかった。彼は彼自身のことをたとえばブリキの切屑であると思ったのである。

誰しも自分自身をあまり愚かな言葉で譬えてみることは好まないであろう。ただ不幸にその心をかきむしられる者のみが、自分自身はブリキの切屑だなどと考えてみる。たしかに彼等は深くふところ手をして物思いに耽ったり、手ににじんだ汗をチョッキの胴で拭いたりして、彼らほどのおの好みのままの恰好をしがちなものはないのである。

山椒魚は閉じた目蓋を開こうとしなかった。何となれば、彼には目蓋を開いたり閉じたりする自由と、その可能とが与えられていただけであつたからなのだ。

その結果、彼の目蓋のなかでは、いかに合点のゆかないことが生じたではなかったか！ 目を閉じるといふ単なる形式が巨大な暗やみを決定してみせたのである。その暗やみは際限もなく拡がった深淵であつた。誰しもこの深淵の深さや広さを言いあててはできないであらう。

——どうか諸君に再びお願いがある。山椒魚がかかる常識に没頭することを軽蔑しないでいただきたい。牢獄の見張り人といえども、よほど気むずかしい時でなくては、終身懲役の囚人が徒らに歎息をもらしたからといって叱りつけはしない。

「ああ、寒いほど独りぼっちだ！」

注意深い心の持主であるならば、山椒魚のすすり泣きの声が岩屋の外にもれているのを聞きのがしはしなかったであらう。

悲歎にくれているものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである。山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかった。そして或る日のこと、岩屋の窓からまぎれこんだ一びきの蛙を外に出ることができないようにした。蛙は山椒魚の頭が岩屋の窓にコロッツの栓となつたので、狼狽のあまり岩壁によじのぼり、天井にとびついて銭苔の鱗にすがりついた。この蛙というのは淀みの水底から水面に、水面から水底に、勢いよく往来して山椒魚を羨ましがらせたところの蛙である。誤って滑り落ちれば、そこには山椒魚の悪党が待っている。

山椒魚は相手の動物を、自分と同じ状態に置くことのできるのが痛快であつたのだ。

「一生涯ここに閉じ込めてやる！」

悪党の呪い言葉はある期間だけでも効験がある。蛙は注意深い足どりで凹みにはいった。そして彼は、これで大丈夫だと信じたので、凹みから顔だけ現わして次のように言った。

「俺は平気だ。」

「出て来い！」

と山椒魚は唳鳴った。そうして彼らは激しい口論をはじめたのである。

「出て行こうと行くまいと、こちらの勝手だ。」

「よろしい、いつまでも勝手にしろ。」

「お前は莫迦だ。」

「お前は莫迦だ。」

彼らは、かかる言葉を幾度となく繰返した。翌日も、その翌日も、同じ言葉で自分を主張し通していたわけである。

一年の月日が過ぎた。

初夏の水や温度は、岩屋の囚人たちをして鉱物から生物に蘇らせた。そこで二個の生物は、今年の夏いっばい次のように口論しつづけた。

朽助のいる谷間

たのである。山椒魚は岩屋の外に出て行くべく頭が肥大しすぎていたことを、すでに相手に見ぬかれてしまっていた。

「お前こそ頭がつかえて、そこから出て行けないだろうか？」

「お前だって、そこから出ては来れまい。」

「それならば、お前から出て行ってみる。」

「お前こそ、そこから降りて来い。」

更に一年の月日が過ぎた。二個の鉱物は、再び二個の生物に変化した。けれど彼等は、今年の夏はお互いに黙り込んで、そしてお互い自分の歎息が相手に聞えないように注意していたのである。

ところが山椒魚よりも先に、岩の凹みの相手は、不注意にも深い歎息をもらしてしまった。それは「ああああ」という最も小さな風の音であった。去年と同じく、しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の歎息を唆したのである。

山椒魚がこれ聞きのがす道理はなかった。彼は上の方を見上げ、かつ友情を腫に罩めてたずねた。

「お前は、さつき大きな息をしたろう？」

相手は自分を鞭撻して答えた。

「それがどうした？」

「そんな返辭をするな。もう、そこから降りて来てもよろしい。」

「空腹で動けない。」

「それでは、もう駄目なようか？」

相手は答えた。

「もう駄目なようだ。」

よほど暫くしてから山椒魚はたずねた。

「お前は今、どういうことを考えているようなのだらうか？」

相手はきわめて遠慮がちに答えた。

「今でもべつにお前のことをおこつてはいないんだ。」

谷木朽助*（本年七十七歳）は実に頑固に私を愚直している。私がいかに遠い旅先へ行っている時でも、彼は毎年、秋になって口から吐く息が白い蒸気となって見える時節になると、私に、松茸やしめじを送ってくれる。うどん箱に苔を敷いて、濁びた茸類を一ぱいつめこんで、箱の表には必ず「オータム吉日」と記してある慣わしである。彼はそれ等の茸類の発生する山の番人である。その山は、すでに私の祖父の時代に他人へ売却したものであるにもかかわらず、彼は頑迷に昔からの習慣を守っているのである。

私は言い忘れないうちに、彼と私との交友を披露しておきたい。

私達兄妹三人は幼い時、兄、私、妹、という順序に、同じ乳母車で育てられた。この乳母車は、ハワイの出稼ぎから帰って来た朽助の贈りものであって、子守として私達を乳母車に乗せて遊ばしてくれたのも朽助なのである。

乳母車の幌には外国語で四行の詩が縫いとりされていたが、その詩の意味は「眠れ、眠れ、幼児よ眠れ。夕陽は彼方に入りそめた」というのだそうである。けれど乳母車に乗っている時には少しも眠りたいなどと思わなかった。私はその外国語の歌を好まなかった。

朽助は乳母車に私を乗せて、終日、庭の木立を縫うて行きつ戻りつした。それ故、泉水の周囲と木犀の木の下には、雨が降っても消えないくらい轍の跡が残った。彼の目には常にものもらいが出来ていて、実にのろのろと車を押したばかりでなく、彼は屢々立ちどまって帯を

しめなおす癖があった。しかし私は乳母車の進行が中止することを好まなかったので、幾度となく彼と口論をした。

「朽助！ 早う行き戻りししてくれというたら。」

「いま帶をしめなおしているんですがな。そんなに言いなさるな。」

「広大なことを言うなというたら、帯なんかどうでもよいがな。」

私が彼をあまり急きたるためらしく、朽助は幾度となく帶をしめなおしたが、常にだらしなく結んだのである。

乳母車のシートをめくると、クッションには黒い色の蝙蝠が幾十匹も描いてあった。蝙蝠達は夕方になると空に舞いあがって、私はクッションの蝙蝠が逃げてしまったのだと信じた。

「朽助！ また蝙蝠が逃げた。早うあれを捕まえてくれというたら。」

「黙って静かにしていなされば、明日の朝になると戻って来ますがな。心配しなさるな。」

「是ッ非、戻るか？」

「是ッ非ですがな。したれど、もう一べん行きし戻りししますぞな。」

「目をつむっていると、後へ走って行くような気がする。朽助らも乗せてみたろうか？」

「つがもない！ 私らは、あとで独り乗ってみますがな。」

朽助は乳母車を押しながら、時としては私に外国語を教えようとした。

「木犀の木や松の木のことは、ツリーといえますぞな。」

私はツリーという言葉直ぐ忘れた。彼は私が忘れる度に、

「物覚えの悪い子供は、アイズルですがな。」

といて叱った。アイズルとは英語の Idle のことなのである。

私は乳母車を妹にゆずった。すでに私は尋常一年生になったのである。そして私は日曜日ごとに、朽助の家へ英語を習いに通うことになった。彼の家は谷底の一軒屋で、おそらく彼はハワイで農業のことを学んでいなかったため、山番をするよりほかに能がなかったものであろう。ところが彼は、私の個人教師としては頗る厳格であった。彼は

私の祖父からもらった袴をはいて、それは机の傍を離れて立ち上ると引きずるほど長いものであったが、彼はしかつめらしく坐って、私にリーダーの三の巻を読んでくれた。そして私が少しでも傍目すること

を許そうとしなかった。私も袴をはかされていたが、私は膝の上に両手を置いて、彼の訳述して行く言葉を諳記することにこころがけた。

「闇は深かりし。將軍は決死の部下を率いてボートに乗りし。岸の柳は將軍の肩にふれ、柳の枝からは夜露が滴りし。櫓の音は極めて微かなりし。將軍は暗き流れを眺め、且つ静かに口吟みて、いくさに出かける人の如くにはあらざりし。」

彼が訳述を終ると、私はそれを迎えた。

「闇は深かりし。將軍はボートに……」

「將軍は決死の……ですがな。」

「將軍は決死の……」

「部下を率いて……ですがな。」

「部下を率いて……」

「部下を率いて……」

「部下を率いて……」

授業が終つて私が帰る時には、朽助は必ず次のような注意を私に与えた。

「橋の上を渡る時に、橋の上に立ちどまつて川をのぞいてはなりませんぞ。」

彼の注意する場所には、谷川の流れが淀んでいて、青い水が渦を巻いていた。その渦の上には、巨大な合飲の木が枝や葉をさしのべて桃色の綿毛を持った花を盛んに散らした。桃色の花は渦巻く水面に浮んで、赤いクレヨンの輪を速やかに描いて消えた。

こんな追憶めいた記録——これはすでに二十年以前のことなのである。そして今は最早、私は東京に住んで不遇な文学青年の暮しをしている。それ故、私は朽助に対して、現在の私が何ういう職業を営んでいるかをさへも、明らかに彼には告げていないのである。この事は

彼の最も不平とするところであるらしい。

私が田舎の家へ帰る度毎に、彼は私を訪ねて来て、何よりも先に私の職業を質問するのである。私はそれに対して常に答えをしないので、彼は私のことを時によつては歯科医であると推定したり、時には技師であると推定したりする。そして帰りに彼は必ず近所の家に寄つて、私が東京で技師をしているとか歯科医をしているとか吹聴し、わがことのように自慢して行く慣わしである。

私は彼のおせっかいを嘲笑するものではない。——私は彼のたった一人の教え子である。二十年前、リーダーの三の巻が終了した時、彼は教え子に対して次のように語つたのである。

「若しあんたが立身せなんだら、私ははいっそつらいでがす。そんなに逢うほどならば、私はなんぼうにもつらいでがす。」

私はそのとき頭がしびれたと思った。そして帰ろうと思つて外に出ると、いつの間に降りだしたのか、雪が谷底にも峰にも一ぱい降り積つていた。

私は知っている。^{*}若し私が、最近の彼の推定は誤つていて私は東京で弁護士をしているのではないということに彼に告白したならば、彼は狼狽と絶望とを罩^さめて言うであらう。

「私はなんぼうにもつらいでがす!」

そして胸に手を置き悲歎に沈むであらう。

私は彼の面前では、あくまでも少壮弁護士を装つていなくてはならまい。

タエトという少女のことについて、私は幾らか言い後れた。私は彼女のことはあまり知つていない。また彼女には一度も会つたことがない。幸い彼女からよこした手紙をここに発表する必要があるのだ、その文面から彼女の経歴をも汲みとることになしよう。

「益々御健勝のことと拝察申しあげます。私どもの方では祖父柊助にとりまして働いております。さて一昨年以來、毎日毎日池の工事が續いてまいりまして、今日では漸く堤防も出来上りました。大きな堤

防であります。山と山との間の谷をせきとめたのでございます。水がたまると周囲二里半の池になる由であります。それで私どもの家は立ち退かなくてはならないのでございます。池は日本政府が許可し命令してつくつてあるのであります故、私どもは立退きに反対することを許されないのですけれど、祖父は如何なることがあつても立ち退かないと反対いたします。しかし池が出来上つて水が池にたまつてしまえば、私どもの家は水の底の一ばん深いところに沈んでしまひましよう。常々祖父から噂をうかがひまして、弁護士のお職においでになるあなたにお願いいたしますれば、祖父も立ち退く決心をいたしますかと思ひます。どうか御手紙にて祖父を説き伏せて下さい。先日も当地から出られた代議士の人が参られました、今度の選挙のとき自分の名譽にも関することであるから、横ぐるまを押さないで立ち退いてくれと申されました。祖父の申しますには、選挙民を買収しようとなぐらんで池をつくつて(中略)と申します。この前の選挙の時にも、赤と白とのだんだん染めの棒を持つて測量師を派遣して測量させたりして、やれ鉄道を敷設してやるのだと演説されましたが、今では沙汰がございませぬ。祖父はそのことを今さら申してまして人々を困らせます。祖父が若し氣まぐれから(中略)を申しますならば、私は(中略)を輕蔑する氣持から負けるように思われます。私は自身のことを申し上げなければなりません。私は一昨年ハワイから祖父の家に参りました。名前はタエトと申します。説明申し上げますならば、祖父(日本人)と祖母(日本人)との仲に出来ました私の母(日本人)と私の父(アメリカ人)との仲に私が生れたのでございます。先年、父はハワイで母や私に無断で故国アメリカへ歸りましたので、私はアメリカ人のような姿ですけれど、やはり日本人でございます。そうして一昨年十二月、私は母に連れられましてここに参りました。その時は谷や山の木が枯れていて、私は寒さや淋しさに弱りました。母は姿も顔も人種的にも日本人で、また貯金もしてましたので、ここに参ると直ぐに再縁いたしました。けれど氣候の変化が原因でしうか、

二箇月目になくなりました。私は日本人としての教育をうけましたので、日本はハワイよりもいいところだと思って、母と一しょに参りました。日本は私の祖国でございます。私は日本人の心を真似て、この谷間で暮すのがいいのだと思っております。(後略)」

私はこの手紙から想像して、そして考えた。朽助はとんでもない口達者な異人娘を背負い込んだものである。おそらく彼は彼女にやりこめられて、森に行つて腕組ばかりしていることであろう。彼は何故、私にタエトのことや池のことを言つてよきさなかつたのであろう。私は早速にも出かけて行つて、彼の利権擁護のために運動してやらなくてはなるまい。場合によっては、県庁まで出かけて行つても述べなくてはなるまい。——私は出発した。

月明りの夜、深い谷底を歩くことは、これは楽しいものである。路は、工事に必要からであらうが、新しく運んだ土で幅広くされ、土の上には荷車の轍が深く刻まれていた。そして繁茂した松柏類の枝や葉は、明るみの斑点を路面に描いた。私は屢々立ちどまつて淵の水面にうつっている歪な月を眺めたり、ステッキで蔓草の花をたたき落したりした。しかし私の楽しい行程は意外に短かつた。谷を挟んでいる山から山にまたがつて、巨大な城壁に似た石崖が築造されていたからである。池の堤防なのである。

私は堤防の基礎から私の立ちどまつた場所までの距離を目算して、堤防の頂上を上目でにらんだ私の視線の角度を意識に入れ、この石崖の高さは三百尺余であることを知った。この堤防の支えるであらう池の水底に、朽助の家が沈むのである。私は石崖の根元を歩きまわつて、堤防の内側に入るべき箇所をさがした。たつた一つの樋が見つかったが、そこから谷川の水が流れ出て、すさまじい水音をたてる滝をつくつていた。滝は大きな淵をつくつているのである。この流れや樋は、池の工事が終ると同時に閉じられてしまふべきものに違いない。何処

かに排水用の大きな樋がなくてはなるまい。私はそれを捜した。そして、石崖の腹ではなくて岩山の腹に、大きなトンネルがあるのを発見することができた。私はマツチを連続的にすりながらトンネルのなかに入つて行つた。涼しい風が吹きぬけた。省線のガードぐらゐの幅と高さである。岩山の台地を弓なりに削りぬいてある天井から水がしたり、岩の凹みに蝙蝠が住んでいた。

トンネルを通りぬけると、朽助の家の窓が見えた。灯がついていて、杏の木の手面を照らしているのである。私は朽助と劇的な対面をしたくなかつたので、遠くから彼を大きな声で呼んだ。

「朽助！ まだ寝てはいないのか？」

翌朝、私は牛の啼きこえや鎌をとぐ音によって目をさました。そして小さな十字架を眺めたが、再び目を閉じた。十字架は枕の横の壁にかかつていたのである。

朽助は窓の外で薪を割りはじめたが、彼は障子を細めにかけて私にたずねた。

「どしんどしん音が響いて、さぞや眠れんでしょうがな？」

私は、響きはしないと答えたり、響いても平気であると言つたりした。

薪を割る音が終ると、今度は木の枝を激しくゆする音がはじまつた。それは、ざわざわという音なのである。つづいて地面におびただし杏の実の落ちて来る音がした。私は寢床から起き上りながら叫んだ。

「朽助！ 青い実も落ちてしまふぞー！」

「平気ですがな。もそつと落してやれ。」

彼は再び枝をゆすりはじめた。窓を明けてみると、朽助は杏の木に登つて、枝にまたがり、自分の重みを前後に動かしながら、杏の木に對しては痛々しいまでに枝をゆさぶつていたのである。地面は箒の跡がつくほど掃除されていたが、とび散つた杏の果実と青葉によつ

て、一面に新鮮な塵芥だらけになっていた。そして碎けた果実から発散する香は、朝の空気に酸味ある色彩をもたらしした。

私は窓に腰をかけて眞をふかした。谷間は、すでに池の底となるべく工事されつくして、赤土のゆるやかな斜面になっていた。

朽助は杏の木の上に残っている一箇の果実を落そうとして、しきりに枝をゆさぶりつづけた。朝の明るみは青葉を透して蒼黒く彼の顔を染め、葉からとび散った朝露がその顔にふりかかっていた。私は彼に、杏の木をあまり残酷に取扱うことは止すように注意したが、彼は更に強く枝をゆさぶりつづけながら言った。

「所詮は立ち退くのでしょうがな！ ああはや、立ち退かずばなるまいでしょうがな！ 昨夜、あんたにさとしてもらった通り、私たちは新しき闘争とかたら、もうやめたる。」

彼は更にひと枝高いところに登って、乱暴に小枝をゆさぶりながら大きな声で言った。

「したれども私たちは、あんたが利権擁護たらの演説をみんなの前でやるどころが見たいでがす。私らも、あんたが流暢な演説をこくところは、またと見られんじやろと思えますがな。」

私は、最早彼が立ち退く決心ならば、人々の前で彼の利権擁護の演説をする必要はないということを言ってきた。彼の言うところによれば、貯水池工事係の人々は、朽助のために小さな家を建ててくれて、さらに貯水池の門番人という役目を彼に与えようとしている。

この役目によって、彼は毎月の給料が入る筈である。私は彼を煽動するために東京からやって来たものではない。

山の頂上を朝の太陽が照しはじめた時、タエトが黒い色の大きな牛を連れて帰って来た。彼女はだぶだぶの菜葉色の詰襟服を着て、ズツクの靴をはいていた。可憐な外国少女である。牛の背中には、丈の長い青草が四束ほど、ふり分けにして載っていた。この牛はタエトの六倍ほどの大きさだが、背中の荷物をおろしてもらうと、タエトの合図に服従して牛小屋に入って行った。合図というのは忙しく三回ほど

舌うちする方法である。私は寝間着に代用したメリヤスの上にズボンをはきながら、彼女の後姿を好ましく眺めた。

——昨夜、私がやって来た時には、彼女はすでに寢床の中に入っていて、私に初対面の挨拶をすることができなかった。彼女は夏のメリヤス一枚の服装で寝ていたからである。彼女は急いで暗い方に顔を向け変えて、熟睡した人の様子を装っていた。したがって私は朽助と小声で語りつづけながら、無遠慮に彼女の寝姿を眺めることができた。髪を短く刈って、これは理髪屋をわずらわしたものでないらしく、鍔のあとが段々になって残っていた。メリヤスのシャツは、少女の肩の丸味を克明に示していた。ランプは高い階台の上に置いてあった。私は彼女の明けひろげた胸さえも見ることもできた。紺緋の枕の横には、彼女の投げ出した袖珍本があった。枕元の壁には——その十字架というのが、朝になって私が目をさましてみると、いつの間にか私の枕元の壁に掛けられていたのである。おそらく朽助が、さしでがましく私の枕元を裝飾するつもりでやった仕事であらう。

タエトは杏の実を拾い集めた。彼女は片手に四箇以上を握ることができなかった。ので、上着の前をまくり上げて、それをエプロンの代用にして果実を入れた。そして、そういう姿体のままで私のところにやって来て、完全な日本語でもって、去年はこの果実を洗わないで食べたことを私に告げた。私はなるべくながく彼女と一しよにいたいため、彼女のエプロンから杏の実をもらって、一口ずつゆっくり齧った。すでに朽助は牛を連れて山へ出かけていたのである。

タエトは私の傍に黙って立っていた。若し私が好色家であるならば、彼女のまくれた上着のところに興味を持ったであろうが、私は元来そういうものではなかった。で、杏を食べることに熱中している様子を装った。しかし、あらゆる好色家に負けない熱心さでもって、私は彼女に次のように言った。

「君も食べたまえ。よく熟したのがうまいぜ。これは酸っぱそうだ

が、これはうまいぜ。」

私は彼女の食慾をそそぐために、わざと青い果実をいくち齧ってみせて、いかにも酸っぱそうに唾液をすすったり口を歪めたりした。彼女は誘惑にうちかつことができなかった。

「いただきます。」

そう言って、彼女は最も小さくて最も青いのをとって、度々（つ）しゃかに齧りはじめた。

「うまいか？」

と私がきくと、彼女はうまいと答えた。

私達は気がついた。一ばん高い山の頂上に六七人の人達が集まって、大きな岩石の方に向って遠くから何か叫んでいたのである。岩石というのは、頂上の赤土の上に黒い色の瘤となってそびえていた。

「あの岩を割るんだろう。」

それに違ひなかった。岩石のかげから一人の男が現われたが、彼は獣の速さで岩石のところから退いて仲間達の群に加わった。

「いまハッパへ火をつけたんです。」

そのときである。ハッパは連続的に爆発した。信じられないほど大きな音であった。その音は谷間の空気を二三寸も動かしたのであろうか。私は頬を空気でたたかれたと思った。私の驚きはそればかりではなかった。岩石は真二つに割けて、土の上に置かれた安定を失ひ、やはり各々が大きな岩石となって、谷間に向ってころがり落ちて来た。後からころがるのが先になった。次第に速力が加わって来た。

タエトは叫んだ。

「ああ、また後のが先になりそうですわ。」

ところが後から追いついた岩石は、前の岩石に激しくぶつかって、陰鬱な響きをたてると同時にバウンドをこころみ、先になってまっしぐらに転落した。追い越された岩石は別のコースをとった。山腹の密林は雄倒（おしやぶ）され、めりめりとかどしんとかの音をたてた。そして二箇の岩石は、殆ど同時に谷底の赤土の上にくるがり落ちて、一つはワルツ

踊をしながら倒れ、他の一つは土の中に半分ほどめり込んだ。

山腹の密林には、岩石の走り去った跡が二条の路となって残った。そしてこの二条の路からは土煙がまいのぼり、谷間には全くの静けさがおしよせた。

「じんじんという音がきこえますわ。」

よほど暫くしてから、谷川の流れる音がきこえているのに気がついた。

私は知っている。そして私達は屢々見たことがある。人々は繁華な都会地のダンスホールに於て、物好きなダンスガールがタエトと同じ風俗であるのを興味深いことと思っているらしい。そしてダンスガール自らは、葉色の詰襟服が自分の手垢で汚れたりだぶだぶの寸法であったりすることを寧ろ誇としているようである。けれど諸君は多くのダンスホールに行ってもみよ。諸君は葉色の詰襟を着た少女に出会すであろうが、タエトの詰襟ほどよごれてだぶだぶなのを見ることができないであろう。

タエトはまぶしい太陽に目を細くしながら藍を刈り取っていた。藍畑は家の裏にあって、その段々畑には、藍と黍と棉とが栽培されていたのである。黍は茎の先から穗状花序の花をのぞかせて、綿は深黄色の花弁を開き、その多くは実を結んでいなかった。実を結んだものだけが、褐色の萼の上に純白の綿毛の玉を支えていた。タエトは時として収穫の手を休め、上着の袖で頬の汗を拭いたり、胸を開いて風を入れたりした。私は窓を細目にあけて、彼女の収穫ぶりを見物していたのである。

彼女は私の存在には気がつかないらしく、口から出まかせの歌をうたって私を微笑させた。彼女のうたう歌というのは容易く訳せる外国語なので、次に訳述してみよう。

「私はおなががすきました。私は汗が出ました。背中までびっしょり汗です。足の裏もびっしょり汗です。」

この意味の言葉を長く引張って、くり返して歌うのである。その結果、彼女の歌は私の読書をいつまでも妨げたので私は外に出た。そして朽助が風呂をわかしているのを手伝った。

風呂は裏口のところの軒下にあった。茂った灌木によって囲まれ、一株の桜の木が湯槽の上に枝をさし出していた。湯槽は木製で途方もなく大きかった。

私と朽助とは一しょにお湯に入って、湯から首だけ現わして談話に耽った。

「眼鏡を脱ぎなされると、あんたは尚さらにアグリー*ですがな。早う眼鏡をかけとりなさいというたら。したれども、私はこれをかけてみたろ。」

彼は棚の上から私の眼鏡をとって、彼の顔にかけた。私は彼の顔から眼鏡をとって、私の顔にかけた。谷間の風景がはっきりと見えた。この風景は東京の湯屋の壁に描いてあるペンキの山水画と同じ効果を現わした。

「あんたは何じややら瘠せとりなざる。ましてや近頃アグリーじや。」
「貧乏のせいだろう。」

「つがもない！ 所詮は女のためでしょうがな？」

「アグリーでは、そういう話もない筈じゃないか。」

「万事はここですがな！」

彼は湯から胸を現わして、その皺のよった胸を平手でたたいた。そして先にお湯を出て行った。

私もお湯からあがって灌木の向側に出た。そして裸体を風に乾かししていると、午後の太陽や光線が、裏庭に茂った樹木の葉を透して戯れに私の体を緑色に染めた。

すでにタエトは藍の収穫を止して、今度は彼女がお湯に入っていたのである。水をこぼしたり流したりする音をさせていたが、彼女は突然すどい叫び声をあげた。それは恐怖に充ちた声であった。何事であるろう。彼女は、少女の裸体に何も着けないで、お湯からとび出して

来て私に報告した。

「毛虫がいます。」

彼女の指さすところには、湯槽のふちに一びきの大きな毛虫が逃げ場を見つげようとして大急ぎで這いまわっていた。私は竹箒で毛虫を掃き落して、再び灌木の向側に出て裸体を緑色に染めてみた。ところがタエトは再びすどい叫び声をあげて、お湯からとび出して来た。

「まあ、何て毛虫でしよう。桜の枝にいつぱいたかっています。」

湯槽の上にさしかかっている桜の木の枝に、黒い大きな毛虫がおびただしく群がっていたのである。彼等はお互に体をからませ合いながら、一つの塊^{かたまり}となっていた。

タエトはズボンをはいて、朽助を呼んで来た。朽助は、毛虫達に向って嘲笑的に言った。

「私たちは四五日すれば立退きじや。したれども、この毛虫らはそれまでには蝶々になれぬじやろ。」

夜になって雨が降りだして、風が吹き出した。雨と風は次第にはげしくなった。

タエトは十字架のかかっている壁に向い、恭しくひざまずいて寝る前の祈りをした。何やら外国語でもって、心をこめて誓っている様子であった。祈りが終ると彼女は寢床に入ったが、朽助に向って、風の音がひどくて眠れないと訴えた。谷間全体が大声に呻ったり狂暴な音響を出したりして、聞きようによつては大地が吠えているように思われたのである。私と朽助ははさみ将棋^{はさみしょうぎ}をくり返していた。

「眠れなんだから、これでも食べてみたらよいがな。」

朽助はそう言つて、タエトに杏の実を与えた。彼女は両手に二箇^{ふた}ずつの果実を持つて、目を見開いていた。

「目をつむつとれというたら。そうしたなれば、眠れようがな。」
彼女は眠れそうだと答えて、暫く目を閉じていたが、再び目を見開いた。